

心から御礼申し上げます。

昨年は、大東亜戦争が終結して七十周年に当たる節目の年でありました。戦没者慰靈に心ある多くの団体が、この節目の年を記念して戦没者に追悼の誠を捧げる様々な集会・行事を催され

新年明けましておめでとうございました。会員の皆様並びに戦没者慰靈諸団体の皆様には、御家族共々、良いお正月をお迎えのこととお喜び申し上げます。また、旧年中は、本協議会の活動に、多大の御協力、御支援をいただき、



島村宜伸会長

年頭のご挨拶



題字揮毫・故 濑島龍三氏

第36号

公益財団法人 大東亜戦争全戦没者慰靈団体協議会

〒102-0073 千代田区九段北3-1-1 靖國神社遊就館内・地階

電話 03 (6380) 8943

FAX 03 (6380) 8952

<http://homepage2.nifty.com/ireikyou>

振替口座 00140-6-334930

編集人 飯田正能
発行人 岩田司朗
印刷所 ヨシダ印刷株式会社

目次

年頭のご挨拶 (島村宜伸会長)	謹賀新年
天皇	皇后両陛下フイリピン御訪問
戦没者の慰靈検討	(その二) レイテ決戦放棄後)
比島 (フィリピン) の戦いと慰靈	(ガダルカナル島未帰還遺骨情報)
拉孟守備隊の戦闘と慰靈	収集活動に参加して
一旧ソ連抑留中死亡者遺骨収集帰還	「涙雨」(ガダルカナル島第五次自主派遣報告)
派遣 (イルクーツク州) 報告	イルクーツク派遺に参加して
慶祝・百歳の御誕生日を迎えた	ガダルカナル島第五次自主派遣報告
三笠宮崇仁親王殿下	一旧ソ連抑留中死亡者遺骨収集帰還
事務局からの報告等	「涙雨」(ガダルカナル島第五次自主派遣報告)

中でも特筆すべきは、四月に天皇、皇后両陛下が自らの強い御意志で、先の大戦における激戦の地、パラオ・ペリリュー島を御訪問になり、戦没者の御慰靈をなされたことであります。南海の地に立たれ、英靈の御靈に深々と御拝礼になられたお姿を拝し、私のみならず、国民の多くが深い感銘を受け、戦没者への慰靈の思いを新たにしました。

昨年の八月十五日の靖國神社参拝者は、例年を遥かに上回る十九万人を数えた由、加えて先の大戦を知らない若い世代参拝者が目立ったとのこと、何よりのことであります。また、千鳥ヶ淵戦没者墓苑においても、例年にも増して多くの人々が参拝に訪れたとのこと、これが終戦七十周年の一年だけのこと、特別の事象に終わらないことを期待したいと思います。

なお、七月四日には、本協議会と戦没者慰靈諸団体が合同で主催した平成二十七年度大東亜戦争全戦没者合同慰靈祭も、お蔭様で例年を超える二七六年(在宅参拝者を含む)の御参加をいたしました。

靖國大絵馬は、愛知県名古屋市伊勢総馬協賛会安田識人氏から御祭神奉慰のため、昭和五十三年から毎年奉納いた



靖國神社奉納大絵馬

謹 賀 新 年

公益財団法人 偕 行 社
 理事長 志摩 篤
 副理事長 塩田 章
 副理事長 深山 敏
 副理事長 寺澤 明
 副理事長 白石 善
 専務理事 大越 兼
 事務局長 利博 行

公益財団法人 水交會
 会長 藤田 幸生
 副会長 古庄 幸一
 副理事長 斎藤 隆
 副理事長 加藤 保
 事務局長 本多 宏隆

公益財団法人 大東亜戦争全戦没者
 慰靈団体協議会
 会長 島村 宜伸
 副会長 岩田 司朗
 理事長 柚木 文夫
 専務理事 圓藤 春喜
 事務局長 岩田 司朗

株式会社 S N A
 株式会社
 キヤリアコンサルティング
 特定非営利活動法人
 孫子経営塾

とができました。御協力いただきまして、皆様に改めて厚く御礼申し上げる次第です。
 また、海外における戦没者御遺骨の収容は、昭和二十七年以来厚生労働省と民間協力団体の手により鋭意進められており、本協議会も民間応募団体の一つとして協力していますが、戦後七十年を経過した今もなお、一一二万余柱が海外各地の山野に遺されたままの痛ましい状況が続いております。まさに失する感はありますが、終戦七十年の昨年、戦没者の御遺骨収容を促進するため、政府挙げての体制作りと民間主体の実行組織作りを主軸とする新たな法律案が国会に上程され、九月に衆議院を通過しましたが、参議院での審議日程の見通しが立たず、新しい年に持ち越されました。遷延に次ぐ遷延で、異郷の地で帰国を待ち侘びておられる戦没者に誠に申し訳ない思いですが、本協議会としても引き続き関係諸団体の御支援、御協力を願っています。

新しい年を迎え、昨年の終戦七十周年の余韻に浸りつつも、積み重なった課題を前に肅然とし、本協議会の使命の重大性と寄せられる期待の大きさに改めて身の引き締まる思いであります。今年も心新たに戦没者慰靈の諸活動に取り組みたいと思いますので、旧年同様、慰靈諸団体並びに会員の皆様の御協力を頼ります。今年も心新たに戦没者慰靈の諸活動におかれましても、今後の慰靈事業永続のための御希望等がありましたが、是非お聞かせ下さるようお願い申します。

先ず、大東亜戦争と戦没者慰靈の思想の普及啓蒙への取り組みですが、國民の多くは、戦没者慰靈に「関心がない」のではなく、実は「知られていなかつたままに記しました。私自身、これまでの端境期でもあります。本協議会はこれまで同様、政府派遣遺骨収容団に申し上げます。

次に、海外戦没者の御遺骨収容については、今年は新しい体制に移行のための端境期でもあります。本協議会は大東亜戦争全戦没者慰靈団体協議会にて、会長 島村 宜伸 平成二十八年元旦に開催されます。本年も、皆様の御協力と御支援をよろしくお願い申し上げます。

民間公募団体として参加する形で協力するとともに、新しい体制が御遺骨収容の抜本的促進につながるよう、実効性ある体制作りに積極的に関わっていきます。関係諸団体の御支援、御協力を切磋琢磨活動を中心としたと想います。また、本年も例年同様、七月に本協議会参加団体及び協力団体の合同の形で大東亜戦争全戦没者合同慰靈祭を執り行います。高齢化が進み、解散を余儀なくされた戦没者慰靈団体についても、永代会員として、そのお名前を連ね、共に慰靈の誠を捧げていただく形で引き続き大事にしたいと思います。

本年も、皆様の御協力と御支援をお願い申し上げます。

旧年を回顧し、新年への願いを思いつくままに記しました。私自身、これらを頭に思い描きながら、心新たに、年頭の靖國神社の神前に額づきたいと思います。

本年も、皆様の御協力と御支援をよろしくお願い申し上げます。

平成二十八年元旦

公益財団法人
 大東亜戦争全戦没者
 慰靈団体協議会
 会長 島村 宜伸

**天皇、皇后両陛下、フィリピン
御訪問―戦没者の慰靈検討**

天皇、皇后両陛下には、本年1月26日から5日間の日程で、国交正常化60周年を迎えるフィリピンを国賓として公式訪問されることが、昨年12月4日の閣議で正式決定した。両陛下の同國御訪問は、皇太子、同妃両殿下時代の(1973年)3月、ルソン島ラグナ

昭和37年(1962年)以来2度目となるが、天皇、皇后両陛下の同國御訪問は初めてとなる。

宮内庁の発表によると、両陛下には1月26日、政府専用機で羽田空港を出発され、首都マニラでの歓迎式典やアキノ同国大統領との御会見、晩餐会に御出席の予定とのことであり、また、

州カリラヤに建立した慰靈碑「比島戦没者の碑」に御参拝、大東亜戦争中フィリピンで戦没した日本人を初めて慰靈される方向で調整されているとのことである。

両国の親善に尽くした人々との御懇談も検討されていることである。戦没者の慰靈顕彰に寄せられる深い大御心の悉さに頭の下がる思いである。(関連記事「比島(フィリピン)の戦いと慰靈(その二 レイテ決戦放棄後)」)

謹賀新年

航空自衛隊退職者団体

つばさ会

会長	吉田正夫
副会長	藤川壽三
副会長	山本修三
副会長	健一郎
副会長	仁
副会長	照

公益財団法人 特攻隊戦没者

慰靈顕彰会

理事長	杉山蕃
副理事長	藤田幸也
専務理事	笠田陽也
事務局長	羽瀬徹也

公益社団法人 隊友会

西元徹也

会長	寺島泰三
副会長	森勉
専務理事	新井光雄
常務理事兼編集長	寺島泰三

一般社団法人 日本郷友連盟

軍学堂

会長	寺島泰三
副会長	森勉
専務理事	新井光雄
常務理事兼編集長	寺島泰三

会長	伍光会
副会長	青林堂
株式会社	青林堂

同台経済懇話会

(総務担当)	植木美知男
事務局長	植木美知男
常務執行役	三本明世
常務理事	吉田正世

会長	寺島泰三
副会長	森勉
専務理事	新井光雄
常務理事兼事務局長	寺島泰三

理事	富田稔
理事	富田稔
中村弘	富田稔

株式会社	防衛システム研究所
株式会社	防衛システム研究所
リエイト	防衛システム研究所

比島(フィリピン)の戦いと 慰靈(その二) レイテ決戦 放棄後

専務理事 圓藤 春喜

一 はじめに

米軍が昭和19年12月7日にレイテ島イピルに上陸。次いで、15日にルソン島南部のミンドロ島に上陸したのを確認した第14方面軍司令官山下奉文大将は、①レイテ決戦の継続は困難、②米軍のルソン島進攻が近い、と判断し、レイテ決戦を放棄し、現地部隊に自活自戦を命じたことは前号(『慰靈』第35号・平成27年9月1日発行)で紹介した。今回、レイテ決戦放棄後の比島における戦いと慰靈について紹介したい。

二 レイテ決戦放棄後の作戦指導

大本営と南方総軍は、方面軍に対しレイテ決戦放棄後も比島全域での決戦を求めたが、方面軍司令官は、レイテ決戦での損耗、彼我戦力、特に海空戦力の懸隔を考慮し、「ルソン島を重視して主力を配備し、自活自戦、永久抗戦の態勢を整備して、米軍主力を比島に長く牽制拘束する」という持久作戦

を採用した。

今回は、レイテ決戦放棄後の比島の戦いの中心となるルソン島における戦いと比島での慰靈を中心に紹介したい。

三 ルソン島の戦い

1 ルソン島の地理等

ルソン島は、図1のよう、南北740km、東西225km、面積10・5万km²(日本の本州の1/2弱)の細長い島で、中部から北は長方形のよう

な形をしており、南東に細長くビコール半島が伸びている。北部は、大部分が山岳地帯であり、大部隊の戦力発揮は道路沿いに限定される。この地域を南北に流れるカガヤン河沿いの地域は、比島の穀倉地帯であり、飛行場も多数存在していた。

中部は、平地が多く、比島最大の米作地帯であり、政経中枢のマニラ首都圏には人口が集中し、大市街地が形成されていた。

また、マニラ北西のクラーク地区に

な形をしており、南東に細長くビコール半島が伸びている。

北部は、

大部隊の戦力発揮は道路沿いに限定さ

れる。

この地域を南北に流れるカガヤ

ン河沿いの地域は、比島の穀倉地帯で

あり、飛行場も多数存在していた。

中部は、平地が多く、比島最大の米

作地帯であり、政経中枢のマニラ首

都圏には人口が集中し、大市街地が形成

されていた。

また、マニラ北西のクラーク地区に

は、大飛行場群があり、彼我制空権確

保のための要地となつていた。

マニラ湾口のコレヒドール島には、

米軍が構築した要塞があり、北方のバ

ターン半島の陣地と相まって艦船の通

過を制約した。

南部のビコール半島は、火山帯の細

長い半島であり、大部隊の行動を制約

した。

民族的には、マレー系が主であった

が、中・米・スペインとの混血も多く、

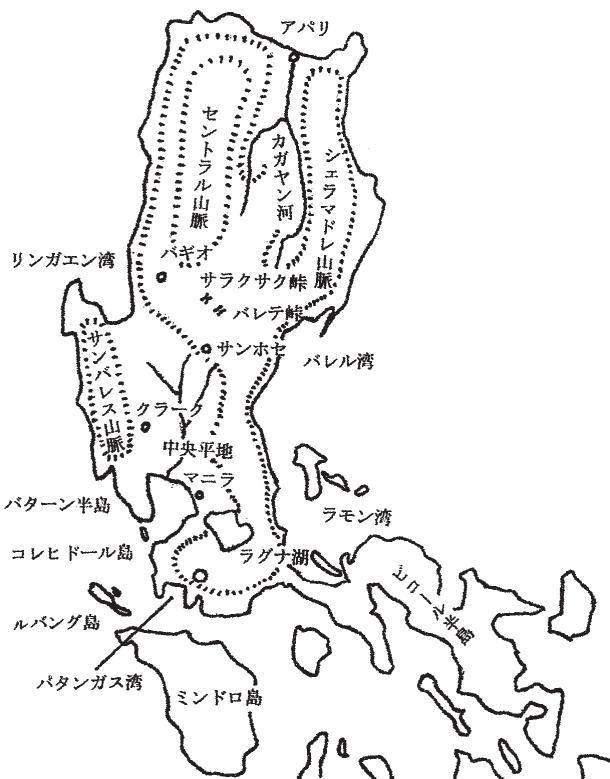
宗教的には、カソリック信者が多かつた。

政治的には、日本の影響下にあつた比国政府統治の下、親日派も多くのものの、戦勢が米国有利に傾き、かつ米軍の活発な工作の結果、圧倒的に親米派が多くなり、抗日ゲリラの勢力は27万余に膨れ上がり、活動も逐次大規模・組織的となり、無視できない勢力に育つていた。

2 第14方面軍の米軍進攻見積もり

米軍のルソン島進攻時期は、昭和20年1月上旬、進攻正面はバタンガス又はリングエンと見積もっていた。因みに大本営、南方総軍は、明春早期にバタンガス又はマニラ正面に進攻と見積もつており、現地軍と上級司令官部との間で緊迫感が異なつていた。

図1 ルソン島の地理



3 第14方面軍の作戦構想

方面軍は、レイテ決戦に多くの戦力を割かれたため、当初の「中部ルソン決戦構想」を、山地部が多く持久容易な「北部ルソン重視の持久作戦構想」に転換し、12月19日に次の作戦構想を下達した。

束する。

指導要領

① **北部拠点守備部隊**（方面軍直轄、4個歩兵師団、1個戦車師団基幹、尚武集団と呼称）
リンガエン東海岸からバ렐湾北岸の線以北を確保し、自活自戦、永久抗戦の態勢を整え、敵主力を牽制拘束し、その戦力の減耗を策する。この間好機を捕捉し主力をもつて攻勢を決行し、敵戦力の撃破に努める。止むを得ざるもダバオ拠点を確保する。
北海岸正面からの進攻に対しては、敵上陸企図の破碎に努め、爾後縦深陣

(2) マニラ東方山地守備隊（長・8師団長、2個師団、マニラ防衛隊、2個旅団基幹、後日振武集団を編成）

敵の減殺に努め、爾後縱深陣地で敵を撃破。

敵の進攻に当たつては、上陸企図の破碎に努め、爾後マニラ東方山地の既設陣地により自活自戦、永久抗戦を継続し、敵戦力の減殺、航空・艦船基地の使用妨害に努める。

マニラ市とその周辺は、韌強なる防御戦闘を遂行し、敵戦力を減殺、好機

米軍の砲爆撃、ゲリラの活動等により、作戦準備は困難を極めた。特にクラーク拠点は、第4航空軍司令官がレイテ決戦に固執し、ルソン島作戦準備に非協力的であつたため、準備が遅れていた。

また、自活自戦に必要な食料の調達・集積も住民の協力が十分でなく、必要な量を集積できなかつた。

4 米軍の進攻と爾後の戦闘推移

米軍は、昭和20年1月6日～8日にかけてリンガエン湾周辺の陣地に対

方針

方針

主力をもつて北部ルソン地区に大拠点を、各一部をもつてマニラ東方山地及びクランク西方山地に拠点を設定し、各自自活自戦、永久抗戦の態勢を整備し、米軍主力をルソン島に牽制拘束

好機を捕捉し主力をもつて攻勢を決行し、敵戦力の撃破に努める。止むを得ざるもダバオ拠点を確保する。

北海岸正面からの進攻に対しても、敵上陸企図の破碎に努め、爾後縱深陣

設陣地により自活自戦、永久抗戦を継続し、敵戦力の減殺、航空・艦船基地の使用妨害に努める。

達・集積も住民の協力が十分でなく、必要な量を集積できなかつた。

図2 方面軍のルソン島作戦構想



クラーク飛行場群地区の拠点を確保し、その機能を發揮させるとともに、敵の使用をできるだけ長く妨害、爾後クラーク西方山地拠点において長期持久。

① 北部拠点（尚武集団）の戦闘
第一波でリンガエン湾北部に上陸した、米第1軍団の2個師団（第43・第6師団）は、第43師団をもつてリンガエン湾東側地区の第一線陣地（第23師団・第58旅団が陣地占領）を、第6師団をもつて東方のサンホセ方面（第2戦車師団が陣地占領）を攻撃し、橋頭

① 北部拠点（尚武集団）の戦闘

① 北部拠点（尚武集団）の戦闘

國

敵の使用ができるだけ長く妨害、爾後クラーク西方山地拠点において長期持久。

第一波でリンガエン湾北部に上陸した、米第1軍団の2個師団（第43・第6師団）は、第43師団をもってリンガエン湾東側地区の第一線陣地（第23師団・第58旅団が陣地占領）を、第6師団をもって東方のサンホセ方面（第2戦車師団が陣地占領）を攻撃し、橋頭

地により敵の内陸への進攻を阻止

輸送等で多忙を極めたが、少ない輸送

堡を拡大した。次いで、第43師団と第6師団の間隙に、後続の3個師団（第25・第32・第1騎兵師団）を逐次投入し、北部拠点を攻撃した。

尚武集団は、陣地による抵抗と反撃により、1月下旬頃まで、第一線陣地で一進一退の攻防を繰り広げるが、2月上旬頃には、尚武集団の第一線陣地は逐次分断・包囲され、戦力も限界に達したため、逐次部隊を縦深陣地に後退させ、2月中旬には指揮・兵

站中枢のあるバギオ周辺拠点陣地とガヤン河谷入口の要衝バレテ峠とサラクサク峠を中心とする陣地（第10師団基幹が陣地占領）に後退し、抵抗を継続した。

バギオ複郭陣地を巡る戦いでは、尚武集団は、米軍の数度にわたる突破・迂回攻撃を撃退するが、4月には遂に米第37師団（マニラ攻略後転用した）の東海岸正面からの迂回攻撃を許し、4月23日にはバギオ拠点守備部隊の力

を核心とする陣地に対し、米軍はバレー正面に第25師団、サラクサク正面に第32師団を投入し、攻勢を強めた。

尚武集団は、両峠を巡る戦いに3個師団（第10・第105・第2戦車師団）基幹を投入し、両峠の確保に努めた。両峠を巡る攻防は、3カ月余にわたり、彼の戦力を磨り潰す一進一退の

更に6月23日には、米軍の空挺部隊が北方のアパリ正面に降下し、尚武集団を南北から撃滅したため、集団はブルグ山（カガヤン河谷周辺の山中の3拠点に分散蟠踞し、補給のない状況下で停戦まで組織的戦闘を続けた。

② クラーケ拠点（建武集団）の戦闘 リンガエン湾南部に上陸した米軍第14軍団の2個師団（第37・第40師団）は、ほとんど抵抗を受けることなく橋頭堡を確立し、引き続きマニラ奪還を目指に南下を続け、1月24日から図5のように建武集団のクラーケ拠点に対する攻撃を開始した。

建武集団は、飛行場群周辺陣地で抵抗するが、30日には飛行場群は米軍の占領するところとなつた。爾後、米第14軍団は、1個師団（第37師団）をもつてマニラに向かつて南下し、1個師団（第40師団）をもつて建武集団のクラーケ西方山地の最終拠点陣地を攻撃した。

建武集団は、拠点陣地で抵抗するが、4月中旬にはこれらの陣地も米軍の占領するところとなり、爾後、建武集団は組織を解体して小部隊に分散

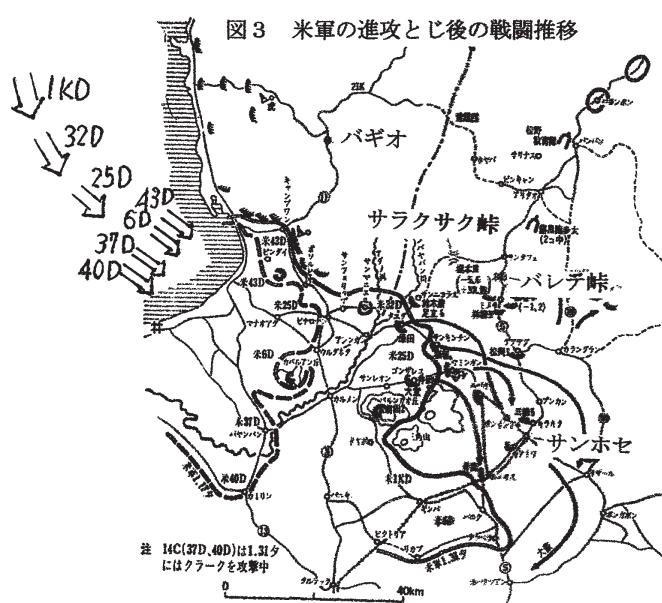


図3 米軍の進攻とその後の戦闘推移

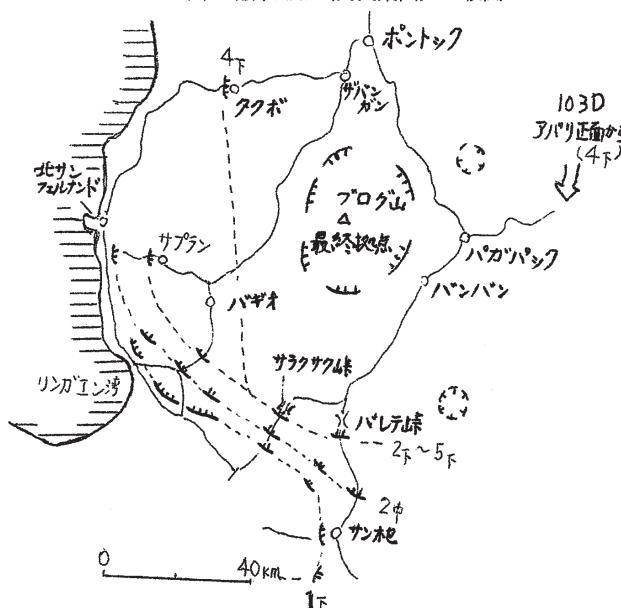


図4 北部拠点（尚武集団）の戦闘

ガヤン河谷正面への転進を命令。26日にはバギオが陥落した。

一方、尚武集団主力にとって最後の砦とも言えるバレテ峠とサラクサク峠

惨憺な戦いとなつたが、5月下旬～6月上旬には、両守備隊は戦力の限界に達し、両峠は米軍の占領するところとなつた。

図5 クラーク西方拠点（建武集団）の戦闘

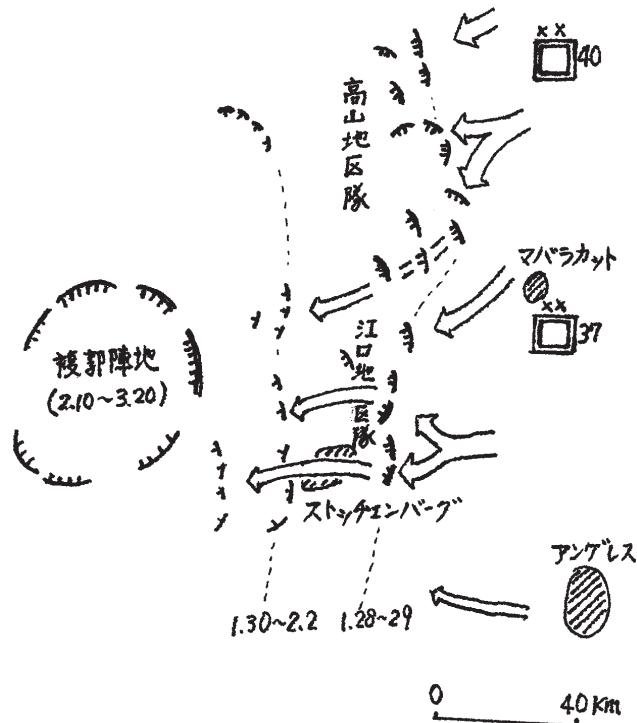
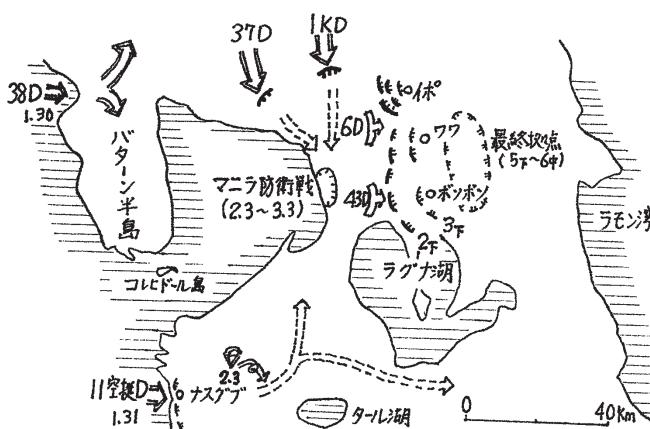


図6 マニラ東方拠点（振武集団）の戦闘



五 特攻作戦

海空戦力の懸隔から、敵艦を撃沈できるのは一撃必殺の特攻攻撃しかないと判断した海軍は、レイテ決戦での栗田艦隊突入に連携して航空特攻作戦を開始し、爾後陸軍もこれに続き、比島作戦全体では665機の航空機が投入され、米軍に多大の損害を与えたものの、戦局を転換するには至らなかつ

し、ピナツボ山周辺山地で停戦まで戦いを続けた。
③ マニラ周辺（振武集団）の戦闘
米軍は、第37師団の南下に連携して、その東側に第1騎兵師団を投入し、2個師団を並列して南下させるとともに、1月30日には、第38師団基幹をバターン半島付け根のスティック湾に、翌31日からは、マニラ南西のナスブグ正面に第11空挺師団を着陸させ、マニラ奪還に向けて多方面から進撃を開始し、2月3日には、南下した2個

師団がマニラ市街地に突入した。振武集団は、マニラ海軍防衛隊をもつて激しい市街戦を展開するとともに、6個大隊をもつて第1次総攻撃を実施したが、米軍に撃退され、3月3日には、マニラ市街地は、米軍の占領するところとなつた。

約1ヵ月の戦闘により、マニラ市街地は廃墟と化し、10万人以上の市民が犠牲になつたと言われているが、大部分は米軍の砲撃によるものだつた。

振武集団は、拠点陣地による防御戦と3月中旬の第2次総攻撃により米軍に大きな損害を与えたが、3月下旬には、第一線守備部隊は戦力の限界に達し、第2線陣地に後退した。米軍は、4月上旬から更に1個師団

を投入し、3個師団をもつて振武集団の第2線陣地に対する攻撃を開始し、6月にはほぼ振武集団の陣地地域を占領した。戦闘推移は図6のとおりである。

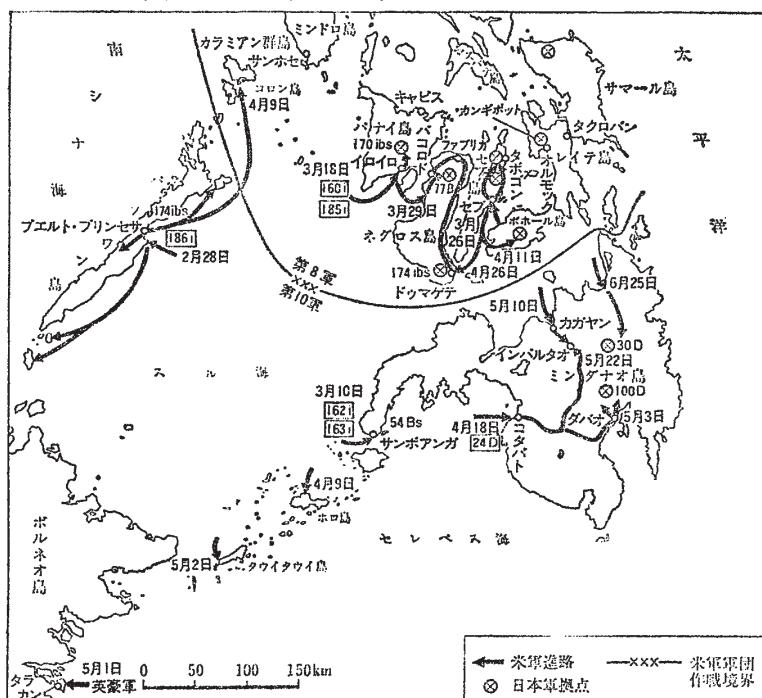
四 その他の島嶼での戦闘

マニラ奪還の目途を付けた米軍は、9月に入つて停戦を知るまで、マニラ

東方山地内で戦いを継続した。

爾後、振武集団は、小部隊に分散し、9月に入つて停戦を知るまで、マニラの第2線陣地に対する攻撃を開始し、6月にはほぼ振武集団の陣地地域を占領した。戦闘推移は図6のとおりである。

図7 その他の島嶼への米軍の進攻



また、ルソン島の戦いには陸海軍の多数の特攻艇（陸軍のレ、海軍の震洋）も投入されたが、上陸用舟艇等の一部に損害を与えたに止まつた。

六 終戦後の状況

山下方面軍司令官は、8月15日に終戦の事実を知り、18日に終戦の詔書を

書に署名している。方面軍のほとんどは、通信連絡、米軍の状況、ビラ等により終戦を知り、9月下旬までに各陣地から出て武装解除に応じているが、この間に疾病・飢餓あるいは戦闘により

多くの将兵を喪っている。しかしながら、分散した部隊の中に、通信手段を持たず、米軍との接触は、通信手段を持たず、米軍との接触もなかつたため、戦後も長く戦い続けた将兵がいたことを忘れてはならぬ。

表 比島作戦参加者と戦没者

	作戦参加者(名)	戦没者(名)
陸軍	503,606	369,029
海軍	127,361	107,747
総計	630,967	476,776
備考	数字は、S33年厚生省発表数字 戦没者はその後増加し現在は厚労省によると518,000名	



戦後29年間戦い続けた小野田少尉

七 比島における慰靈

1 遺骨収容・帰還事業

比島の戦いには63万余名が参戦したが、戦没者は上表のように、昭和33年当時は47万余名が確認されていたが、その後も増え続け、現在は51万8千余名が認定されており、比島作戦では、大東亜戦争中のどの戦域よりも多くの戦没者を出している。

これら戦没者の御遺骨で、収容帰還したものは14万8520柱（約29%）に過ぎず、約37万柱の御遺骨が現地に遺されたまである。

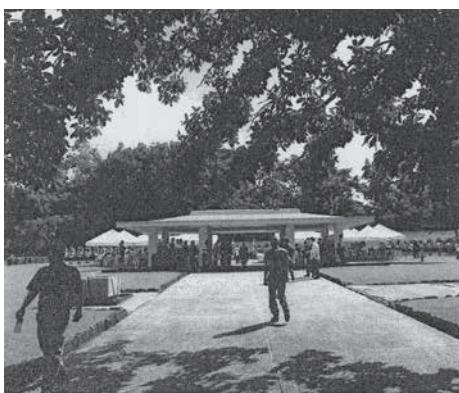
特に、平成23年に「現地人が先祖の墓を掘り起こして収集した多くの遺骨を買い取り、戦没者遺骨と称して日本に持ち帰った」という事案が明らかとなつて以降中断したまである。

現在厚生労働省は、再開に向けてフィリピン政府と協定締結に努力中となつて以降中断したまである。

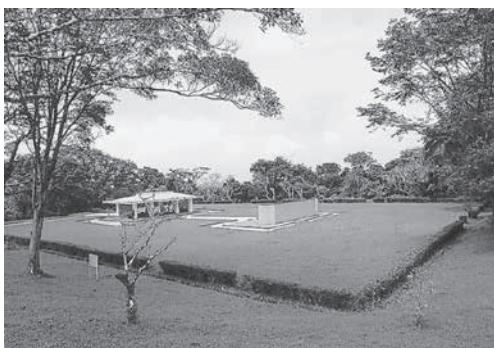
2 戰没者の慰靈

日本政府は、比島の戦いにおける戦没者を慰靈するため、昭和48年3月にラグナ湖南側のラグナ州カリラヤに国

い。特に、日本の捲土重来を信じ、ルパンゲ島で戦後29年間も戦い続けた小野田寛郎少尉（故人）のことは国民等しく心に留めておくべきことと思う。



フィリピン国立慰霊碑と慰霊祭
(ルソン島ラグナ州カリラヤ)



フィリピン・カリラヤ慰霊公園全景

お知らせ

カリラヤ慰霊公園内に個人または、団体で慰霊碑等を建立されていた方々にお知らせいたします。

この地は、フィリピン電力公社が管理している土地であり、当社の許可を得ず慰霊碑等を建立することを禁止しております。

今般、これらの慰霊碑等については、景観保護上問題がありますので、同公園内の日本国のお墓碑等を現形を保った上で埋設しましたので、ご理解の程よろしくお願い申し上げます。

なお、本件に関するお問い合わせにつきましては、下記までお願いします。

平成21年3月14日

（問い合わせ先）
厚生労働省社会・援護局援護企画課外事室

民間建立慰霊碑整理の立札

立慰霊碑を建立するとともに、周辺に、広大な日本庭園を造園し、フィリピン政府に寄贈。管理をフィリピン電力公社に委託し、良好な状態で維持されている。

戦友遺族会が、その後カリラヤ墓地に建立した慰霊碑は、美観や管理面から国立慰霊碑周辺に集約して埋設されているとのことである。

八 終わりに

比島の戦いは、正に日米両軍が全力を傾注した戦いであった。

マッカーサー総司令官が日本本土進攻に使用を予定していた部隊主力を、約10ヵ月間にわたって比島に拘束し、持久目的を十分達成したこの戦いは、

米軍の戦史の中でも賞賛されている。この持久目的が達成できた原因は、政府に寄贈。管理をフィリピン電力公社に委託し、良好な状態で維持されている。

① 山下方面軍司令官の卓越した指揮率

アレイテ決戦に固執する上級司令部を説き伏せ、レイテ決戦を早期に見切るとともに、ルソン島の戦いを「中部平地決戦構想」から「3大拠点維持構想」に転換し、短期間で作戦準備を完璧し、我が軍に有利な戦場で戦えるよう指導したこと。

イ 疾病と飢餓に苦しむ各部隊に対し

レーバ島の戦いと比島の戦いの責めを一身に負って裁判に臨まれたという。

山下大将は、昭和20年12月7日に死刑の判決を受け、昭和21年2月23日に刑が執行されたが、その時に遺された辞世の和歌を次に紹介したい。

待てしばし、歎のこしてゆきし友

ても、玉碎を戒め、最後の一兵まで、自活自戦、永久抗戦に徹するよう指導したこと。

② 補給途絶下、疾病と飢餓、弾薬・糧食の欠乏、米軍の攻撃、住民のゲリラ活動等に苦しみながら、戦い続けた将兵の善戦敢闘。

山下方面軍司令官は、終戦後マニラの軍事法廷で裁判にかけられるが、マニラ半島の戦いと比島の戦いの責めを一身に負って裁判に臨まれたという。

山下大将は、昭和20年12月7日に死刑の判決を受け、昭和21年2月23日に刑が執行されたが、その時に遺された辞世の和歌を次に紹介したい。

待てしばし、歎のこしてゆきし友

あとなしたいて 我もゆきなむ
この稿の執筆中に、今年初めにも天皇、皇后両陛下がフィリピン共和国と

の国交樹立60周年を記念して、戦後初めてフィリピンを訪問されることが宮内庁から発表された。

訪問計画は、両陛下の戦没者に対する御心も考慮して立てられるとのことである。

比島で戦没された51万8000余の骨収容帰還事業が再開され、多くの御遺骨が早期に祖国へ帰還できることを願つてこの稿を閉じることとする。

拉孟守備隊の戦闘と慰靈②

常務理事兼事務局長
岩田 司朗

隊本部に呼ばれ、金光守備隊長から、
次のように言われた。
「守備隊が最後を迎えた後、貴官は陣地を脱出して、龍陵の司令部へ戦況報告に行つてもらいたい」と。

一はじめに

二 昭和17年～19年頃の雲南及び北ビルマの全般情勢

三 第1期戦闘経過の概要（昭和19年6月1日～8月2日）

四 第2期戦闘経過の概要（昭和19年8月2日～8月22日）

五 守備隊の玉碎

（以上「拉孟守備隊の戦闘と慰靈①」とし

て、前号「慰靈」第35号（平成27年9月1日発行）11頁（13頁）に掲載）

六 拉孟玉碎戦の生存者

拉孟守備隊は、全員が壮絶な戦闘を経て玉碎したが、20名乃至30名が陣地から脱出し、あるいは捕虜となつて命を取り留めた人々がいる。

そんな中で、金光守備隊長の命令により、玉碎寸前の拉孟陣地から脱出を図り、無事、龍陵の兵团司令部に行き着いた将兵がいる。

野砲兵第56聯隊第3大隊第7中隊付として、昭和19年5月初めに赴任してきた木下昌巳中尉（8月1日付で中尉に進級）は、8月11日、音部山の守備

雲南遠征軍の重開をかい潜り、木下中尉らは、9月11日夕刻、無事に第56師団歩兵団司令部に辿り着いた。

終戦後、復員した木下中尉は、拉孟守備隊将兵の御遺族をくまなく訪ね歩き、勇戦敢闘の状況を報告されたとのことである。

七 拉孟の現況、慰靈巡拝

2012（平成24）年4月末、遠藤

女史は、拉孟を訪れ、その様子を、前掲の著書の中で、次のように記述している。

「拉孟の赤土を踏んだ時の感動は、今なお消え去らない。雨上がりの山上の戦場跡は、松林の匂いがたちこめ、雨

に至るまで、この拉孟の戦闘の模様を伝えねばならぬ義務があると思う。

このことは、松井聯隊長殿にも師団司令部にも既に報告してあるので、貴官に是非やつてもらいたい。これは守備隊長の命令だ。

もし内地に帰る機会があれば、戦死した将兵の遺族にも戦闘の模様を伝えてもらいたい。それから、脱出する時には、1、2名、伝令を連れて行け」と。

9月7日、金光少佐から守備隊の指揮を受け継いだ真鍋大尉から改めて脱出の命令を受け、木下中尉以下3名は拉孟陣地からの脱出を図った。

恵通橋から紅旗橋を望む
(「蓑口一哲著「戦場取材の旅」)

中国では現在も引き続き旧日本軍の遺骨収集は許されていない。異郷の地で果てた拉孟守備兵の夥しい遺骨は、今なお故郷に帰ることもできず、人里離れた松林の山上のどこかで眠っている。若い兵士たちは、最後に何を思つてこの松山で死んでいったのだろうか。足元の濡れた赤泥土に兵士たちの靈魂が練り込まれているように感じた。

平田さんは、1998（平成10）年11月にも拉孟陣地を訪れているが、

時は山頂の陣地まで急な斜面を自力で登るほかなく、高齢の元将兵らには体力的に厳しいものがあつた。ところが、今回私たちが訪れた時には、山の斜面に木製の遊歩道や階段が建設中であつた。最近、松山の拉孟陣地は、「爱国主义教育」の観光スポットになつているようだ。私たちが宿泊していた龍陵賓館の部屋のガイドブックにも、松山（拉孟）で「爱国主义教育」を受けている中学生の写真が掲載されている。
・・・（中略）・・・

雲南西部の戦場跡を歩いてみて、想像以上に戦争遺跡が整備、保存されて

いることに驚いた。戦場跡の建立年月中では2004年以降のものが多い。その頃から雲南戦の戦跡の保存、整備が積極的に行われてきたようである。

その理由は何か。1980年代頃ま

では、中国政府は、中国が唯一完全勝利した雲南戦の扱い手が蒋介石の国民政府軍であったことから、拉孟戦や騰越戦は、ずっと黙殺し続けてきた。と

ころが、1990年代の江沢民政権期

になつて、歴史認識問題などで愛国主

義教育の機運が高まるなか、雲南戦に

おいて日本軍の侵略戦争の史実の証拠

収集が盛んに行われるようになつたと

いう。1994（平成6）年9月には、



国殤墓苑にある「倭塚」

党中央宣伝部の名で「爱国主义教育実施綱領」が公布された。

こうして中国政府は、近年、「歴史の空白」をようやく埋め始めている。ただし、雲南戦跡に刻まれた文言をよく見ると、雲南戦は、あたかも共産党軍が主導の戦争であつたかのよう再解釈され記録されていることが分かる。また、著者は、拉孟守備隊と同時期の1944（昭和19）年9月14日、守備隊2000名が玉碎した、「騰越の戦場跡を訪れ、次のように語っている。

「騰越にある『国殤墓苑』を訪ねた。

1945（昭和20）年、蒋介石政権下において雲南戦で戦死した中国兵の墓苑である。ここには、滇西抗戦記念館

（中略）・・・この国殤墓苑は、

1945（昭和20）年7月7日、李根

源の提唱で建設された。戦没中国兵

の戦没者の墓苑だが、『倭塚』は日本

兵（4名）を葬った墓だという。他所

では見かけない珍しいものだ。・・・

（中略）・・・この国殤墓苑は、

1945（昭和20）年7月7日、李根

源の提唱で建設された。戦没中国兵

の墓苑であり、その中に、米軍

將校十九名の慰靈碑がある。隣接した

場所に、2004（平成14）年9月24

日の日付の、「米中両軍の若い兵士ら

の犠牲の哀悼と米中友好を求める」と

いう内容のブッシュ米大統領の書簡が

透明のパネルでカバーし展示されてい

る。

これからも、中国政府の爱国主义教

育の中に入り組められた第二次大戦に

おける同じ連合国としての親米傾向が

うかがわれる。

中国共産黨の爱国主义教育の意図に

ついて、今回の旅の同行者一人、近

代中国の政治、文化、経済に詳しい樋

原克夫教授（愛知大学）は、次のよう

（注…本稿は、特に出典の記述がない

ものについては、『雲南正面の作戦（ビ

ルマ北東部の決戦』）陸戦史研究普及

会編（原書房刊）、『悲劇の戦場（ビル

マ戦記）丸別冊（潮書房刊）から引

用した。）

が併設されている。広大な敷地に入ると、まず目に付くのは高さ一メートル直經一メートル半ほどの饅頭状の『倭塚』だ。筆跡は李根源（1879年～1965年）は雲南省出身の有名な軍人、政治家である。国殤墓苑は中国軍の戦没者の墓苑だが、『倭塚』は日本兵（4名）を葬った墓だという。他所では見かけない珍しいものだ。・・・

（中略）・・・この国殤墓苑は、

1945（昭和20）年7月7日、李根

源の提唱で建設された。戦没中国兵

の墓苑であり、その中に、米軍

將校十九名の慰靈碑がある。隣接した

場所に、2004（平成14）年9月24

日の日付の、「米中両軍の若い兵士ら

の犠牲の哀悼と米中友好を求める」と

いう内容のブッシュ米大統領の書簡が

透明のパネルでカバーし展示されてい

る。

これからも、中国政府の爱国主义教

育の中に入り組められた第二次大戦に

おける同じ連合国としての親米傾向が

うかがわれる。

中国共産黨の爱国主义教育の意図に

ついて、今回の旅の同行者一人、近

代中国の政治、文化、経済に詳しい樋

原克夫教授（愛知大学）は、次のよう

（注…本稿は、特に出典の記述がない

ものについては、『雲南正面の作戦（ビ

ルマ北東部の決戦』）陸戦史研究普及

会編（原書房刊）、『悲劇の戦場（ビル

マ戦記）丸別冊（潮書房刊）から引

用した。）

（わざか数日の経験からの判断だが、

中国共産黨は国境を越えた南の地域と

より緊密な一体化を進めることで滇西

地方、つまり雲南省西部における経済

開発を目指しているようだ。国境を越

えた広い地域の一体化には『抗日戦

争』を持ち出すのが得策という考え方

はなかろうか』

中国政府は、およそ一〇年前から積

極的に雲南戦線の戦跡の整備、保存を

行っている。同政府の雲南戦跡保存の

意図の中には、爱国主义教育の進展に

加え、中国雲南と東南アジア諸地域の

一体化を図るための政治的、経済的思

惑が多分に絡み合っているようだ。

・・・（後略）・・・

厚生労働省の資料によると、中国に

は、東北部（ノモンハンを含む）に

20万6000余柱、その他の地域に

27000余柱の御遺骨が、未収容と

なつてゐる。両国間の政治情勢からそ

の収容還事業が難しいとのことであ

るが、外交努力により、先ずは関連情

報の収集の糸口でも掴んでもらいたい

ものである。

〔編注・次の論稿は、ガダルカナル島未送還遺骨情報収集活動に参加された靖國神社権禪宜・後藤智司氏の報告記号(平成27年11月1日発行)に掲載されたものであるが、お許しを得て転載させていただいた。〕

ガダルカナル島未送還遺骨情報収集活動に参加して

靖國神社権禪宜 後藤 智司

昨年実施された第四次隊の活動場所である通称「丸山道」の第一野戦病院仮設地と異なり、そこから約6キロほど北西方向の地域(ベラバウ)及びタナビーチにて収骨活動を行つた。我々のベラバウ組一行は午前6時半ホテルを出發し、午前7時頃中継地のバラナ村において現地人スタッフと合流し、更に未舗装路を車にて30分程進んだ。ジヤングルに入ると、現地人スタッフがブツシユナイフ(蛮刀)で道を作

りながら約20分進んだ場所を拠点と定めて、この周囲で活動を行つた。そこはかつて第一二四聯隊が米軍と対峙し戦闘が行われた地域であり、1980年代にも遺骨収集活動を行われた。しか

し、現地のソロモン人の村長の話によると、まだ多数の遺骨が未収集の可能性があるということから、今回この場所での活動が実施されたのだった。

我々は日本人2~3名、現地ソロモン人4~5名ずつの4組に分かれ、日本軍の陣地として使用したと思われる斜面を捜索した。稜線より数メートル下がつた辺りで早速指や腕と思われる骨、更に見立て45度程の急斜面を40~50メートル程下がつた辺りで頭骨の一



遺骨収容活動の様子



慰靈巡拝にて「海ゆかば」奉唱



御遺骨の焼骨式へ向かう隊員

翌日は更に下方の川沿い、あるいは野戦病院跡地と思われる場所で活動が行われた。前日同様、多数の骨片や頭骨が発見され、同時に写真のフィルムやボタン、ガスマスクのガラス部分、薬品ビンや葉莢、「軍用」の文字の入った歯ブラシ等も発掘された。かつて日本人が、確かにここで戦っていたといふ「証」とも言えるこれらの遺留品を手に、しばしば時に思いを馳せると、非常に感慨深いものがあつた。しか

タナビーチでは、一柱分の上半身の部が発見された。ここで見つかった骨はいずれも部分的なものばかりで、現地のソロモン人によると長年の風雨により斜面を流されたものであろうとのことだった。

翌日は更に下方の川沿い、あるいは野戦病院跡地と思われる場所で活動が行われた。前日同様、多数の骨片や頭骨が発見され、同時に写真のフィルムやボタン、ガスマスクのガラス部分、薬品ビンや葉莢、「軍用」の文字の入った歯ブラシ等も発掘された。かつて日本人が、確かにここで戦っていたといふ「証」とも言えるこれらの遺留品を手に、しばしば時に思いを馳せると、非常に感慨深いものがあつた。しかし、これらの品々は国外への持ち出しが出来ないため、焼骨式で御遺骨と一緒に焼却し、燃え残った灰と共に現地に埋葬しなければならず、大変複雑な思いであった。

9日には、コカンボナ村にあるソロモン群島方面全戦没者慰靈碑の前において、厚生労働省主催の焼骨式が執り行われた。その後引き続いて神式、仏

式（日蓮宗）による慰靈祭・慰靈法要が厳肅に斎行された。

翌日は、輸送船鬼怒川丸が座礁したまま遺されている海岸やムカデ高地等にある島内の慰靈碑において挙式及び法事を執り行い、ビル村博物館を見学した。

今回の活動で、戦後70年を経た今日でも、未だに多くの御遺骨が収容されないまま国外に遺されている現状を目の当たりにした。私達は、御遺骨を早く祖国へお還ししたいとの思いを強くした。そして「白木の箱のみが帰ってきた」と御遺族から伺った話を思い出し、見知らぬ土地で散華された英霊、そして遺された御家族の心情を思うと胸が詰まる思いがした。

今回の派遣を通して、実際に多くの将兵が、その身の果てた地に額すべく、戦没された英靈の思いを今後も正しい形で継承していくなければならない決意した次第である。

涙 雨

第五次自主派遣報告

関東学院大学一年 松井恵理子



表題は、当協議会の参加団体である「特定非営利活動法人 J Y M A 日本青年遺骨収集団」（平成20年度に改名）に登記上は「特定非営利活動法人ジエイワイエムエイ」と表示、英文表記は「Japan Youth Memorial Association」略称「NPOJYMA」の機関紙（月刊）の題字であるが、その第188号（平成27年11月1日発行）に、ガダルカナル島未送還遺骨情報収集第五次自主派遣（平成27年8月29日～9月12日）及び旧ソ連（イルクーツク州）抑留中死亡者遺骨収集帰還派遣（平成27年7月15日～29日）に、それぞれ参加した隊員の感銘深い報告記が掲載されているので、今回もご丁承を得てその一部を転載させていただいた。

◇ ◇ ◇

成田を発つて約16時間が経とうとした頃、飛行機の中から見えた密林を目にした時、自分が本当にガダルカナルに来たことを痛感させられた。

旧第一野戦病院跡での活動初日の朝は強い雨に見舞われた。しかし、バラナ村へ向かう車両内で、冒頭に述べた指揮隊長の言葉を聞き、その瞬間雨の音が一層強くなつたように思われた。しかし、バラナ村に到着し、活動地に入るまでには、空には陽が差し暑いほどになつた。打って変わつた空の様子はまるで笑顔のようで、この時から恥ずかしい話であるが、空を見てこの地で散華された英靈たちに思いを馳せるようになつた。

旧野戦病院跡の活動地は想像以上の密林で、5メートル先を一人で行けば迷つてしまふほどであった。70年前、ここに体を寝かされ、空を仰いだ英靈たちは何を思ったのだろうか。遠い故郷で自分の帰りを待つ家族だろうか。恋人だろうか。そう思うと一刻でも早く故郷へお帰しなければならないと強く感じた。

木が隙間なく生い茂っているため、あつたのだろうか。遺骨収容活動をする者として、また、一人の日本人として自分がガダルカナル島を訪れた意義を考えながら、去る2週間を振り返してみようと思う。

成田を発つて約16時間が経とうとした頃、飛行機の中から見えた密林を目には、水分補給をしながら、小隊へ振り分けられたソロモン人の案内に従い、手探りで土を掘つた。小隊長の所持する金属探知機が反応する箇所を掘る度に遺留品の数々を発見した。当時を偲ばせた時、自分が本当にガダルカナルは流れ木々の漣が聞こえた。70余年前も同じ風の音を聞いたのだろうか。活動日自体は6日間あり、今次派遣では本隊で9柱の御遺骨を収容することができた。私自身が収容した御遺骨は、いずれも骨片であつたが、自身の手で御遺骨を収容した時は、喜びさえ覚えたものだった。温暖な地の御遺骨は非常にろく、土に還ろうとしている。手に取ると崩れてしまいそうな御遺骨は、流れ去つた月日の長さをいやでも感じさせた。こんなにも長い間、こんなにも日本から遠く離れた場所で眠り続けていたことに、私は深い悲しみを覚えた。

日本から遠く離れた場所で眠り続けるために静寂が流れる。ふと周りを見渡した時、ジャングルのその寂寥とした、あるいは穏やかとも言うべき搜索活動場所は、隊員皆が夢中で活動するためだ。

かつてここに在つたであろう喧騒は、時を経て自然の中に飲まれている。野

戦病院跡で私が初めて骨片を発見した時、滴るような弱い雨が降った。それはまるで、本当に涙のよう�습니다。

土を掘る手を休められなくなつた。

1日の搜索時間はどうしても限られ

てしまうため、毎日活動終了時間はやるせなさが積もる。しかし、例えどん

に小さな骨片であつても、日本にお

帰しすることができるのなら喜ばしい

限りであると今では思う。今次派遣の

中で、この島の持つ過去に触れ、過去の史実をどう認識し、今の自分と向き合っていくべきかという問い合わせ自分の

中に生まれた。ガダルカナルを訪れた意義は、色濃く戦の傷跡が残る島で、自分が感じたものもの感情、それにゆっくりと向き合うことができたこと

だと思う。

最後に崎津隊長を始め、多くの関係者の皆様のお蔭で今次派遣を無事終えることができました。誠に有り難うございました。

イルクーツク派遣に参加して

駒澤大学三年 堀口 舞

今次派遣は、ロシア連邦イルクーツク州ウソーリエ・シビルスコエ市マリ

タ村集団埋葬地にて活動を行い、当法人から堀口舞（駒澤大学三年）と北村奈緒香（立命館アジア太平洋大学二年）が参加した。

成田空港を出発し、ハバロフスクで

イルクーツク行きの国内線に乗り換え

たが、ハバロフスクは大荒れの天気で、

ダンボール等の包装用品が濡れてしま

うなど大変な長距離の移動であった。

そんな日本から遠く離れたマリタ村に

到着し、早速翌日から活動を開始した。

マリタ村集団埋葬地は車の往来が激

しい幹線道路のすぐ脇にあり、二つの

慰靈碑が少し離れて並んで建っている

場所で、二〇〇柱を超える抑留中死亡

者が埋葬されているという記録が残っ

ている。

収容活動初日、慰靈碑を大きく囲む

ように四角形を描き、その端から掘削

を開始した。活動を開始して10分も経

たないうちに御遺骨を発見、その隣、ま

たその隣と順に掘り進めて行き、1週

間の活動で80近い箇所を掘削、七六柱

の御遺骨を発見、収容した。収容した御

遺骨の状態は様々だが、そのほとんど

が頭骨から足の指まで揃う完全体での

発見であった。中には頭骨のみ発見で

きない御遺骨が数柱あり、ご一緒した

御遺族によれば、脳炎ダニなどの病気

にかかるていたのでは、とのことだった。

実際はどのような理由からなのか、私たちには想像することしかできず、もどかしさを感じた。

慰靈碑を囲む柵を一時的に取り除

き、慰靈碑周辺を掘削していた際、朽

ち果てた白い箱を発見した。中を調べ

てみると、推定三柱の御遺骨が白布に

包まれた状態で見付かり、御遺骨の上

にはお札のような物が多数載せられて

いた。ここでも想像しかできないが、

恐らく慰靈碑を建立した際に発見し、

収容された御遺骨を安置していたので

はないかということだった。御遺骨の

状態は悪く、かなり時間が経っている

ようになつた。慰靈碑を建立してから

どうして今まで安置されてきたのかは分からぬが、今回派遣団が収容

した御遺骨と共に日本にお帰しするこ

とに至つた。

20歳前後のマリタ村の青年達が1週

間にわたる収容活動に協力してくれ

た。彼らの指揮者としてマリタ村村会議員の女性たちも連日活動地に足を運

んでくれ、昼食の支援など細かい点まで派遣団をサポートして下さつた。

活動初日、互いに挨拶を済ませ、い

よいよ掘削を始めようとすると、彼女

が大きな声で何かを話し始めた。「今

から搜索するのは決して物ではない。

形は違えど、かつては今の私たちと同



左 堀口隊員、右 北村隊員



赤坂御用地内を散策されている三笠宮、同妃両殿下（平成27年11月16日）（宮内庁提供）

慶祝・百歳の御誕生日を迎えた三笠宮崇仁親王殿下

昨年12月2日、当協議会の初代名譽総裁を務められた（平成17年7月～23年6月）三笠宮崇仁親王殿下には、百歳（百寿）の御誕生日を迎えた。誠に慶賀にたえないところである。

宮内庁によると、明治以降で皇族が百歳を迎えるのは初めて、とのことです。3年前に心臓手術をお受けになられたが、その後お元気で、赤坂御用地内の宮邸では、百合子妃殿下（92歳）と一緒にダンベルで運動をされたり、庭内を散策されたりして過

ごしておられるとのことである。

御誕生日に当たり、「百歳を迎えるからといって、これまでと何ら変わることはありません。世界中の人々の幸

せを願い、百合子に感謝しつつ、楽ししく穏やかな日々を過ごしたいと思います」と、文書で所感を述べられた。

事務局からの報告等

一 平成27年度臨時理事会の開催

平成27年10月27日（火）、当協議会会議室において、平成27年度臨時理事会を開催した。

本会議では、事務局からの提出議題等について、熱心な討議が交わされた。議案はそれぞれ原案どおり承認された。

1 議案

- 第1号議案—財産運用の今後と「財産管理規定」の改正
- 第2号議案—平成27年度上半期職務執行状況（報告）
- 懇談・報告事項
- ・ 戦没者遺骨収集帰還事業促進化法案
- ・ 「日本宝くじ協会の公益事業への助成」申請

2 出席者

理事11名中9名及び監事2名が出席

大祭が斎行され、当協議会から圓藤春喜専務理事が参列した。

4 平成27年度秋季慰靈祭

平成27年10月19日（月）、千鳥ヶ淵

戦没者墓苑において、同墓苑奉仕会主催による平成27年度秋季慰靈祭が執り行われ、当協議会から島村宣伸会長、

2 回慰靈諸団体連絡会議を開催した。

本会議では、遺骨収集帰還事業推進法（案）に基づく指定法人の設立に関する意見・要望等について、活発な意見交換が行われた。

2 回慰靈諸団体連絡会議の開催

平成27年12月10日（木）、靖國会館

「玉垣の間」において、平成27年度第2回慰靈諸団体連絡会議を開催した。

5 ソン連抑留犠牲者鎮魂慰靈祭

平成26年11月3日（火）、千鳥ヶ淵

戦没者墓苑において、ソ連強制抑留戰

友会東京ヤゴタ会主催によるソ連抑留犠牲者鎮魂慰靈祭が執り行われ、当協

6 慶應義塾戦没者追悼会

平成27年11月14日（土）、慶應義塾

大学三田キャンパス北館ホールにおい

て、慶應義塾戦没塾員追悼会が執り行

われ、圓藤春喜専務理事が参列した。

四 硫黄島遺骨帰還通常派遣事業への参画

平成27年度第3回派遣が11月25日

（水）から12月9日（水）までの間実

施され、当協議会からの派遣団員とし

て、隊友会2名が参加し、御遺骨の收

容に献身されました。気温攝氏60度以

上の高温多湿、狭い洞窟内での収容作業で、体力の消耗が著しく、大変御苦労されたとのこと、お疲れ様でした。

3 靖國神社秋季例大祭

平成27年10月18日、靖國神社秋季例

